

『量評釈』の章の順序について (1)

木 村 誠 司

I

ダルマキールティ Dharmakīrti (600–660) の主著『量評釈』 *Pramāṇavārttika*, *Tshad ma rnam par 'grel pa* は四章からなる論理学書である。その章の順序に関して、古来、次の二説が主張されてきた。

第一説 I 「為自比量」 *svārthānumāna*, *rang don rjes su dpag pa* 章, II 「量成就」 *pramāṇasiddhi*, *tshad ma grub pa* 章, III 「現量」 *pratyakṣa mngon sum* 章, IV 「為他比量」 *parārthānumāna*, *gzhan don rjes su dpag pa* 章

第二説 I 「量成就」章, II 「現量」章, III 「為自比量」章, IV 「為他比量」章
 一体、どちらがダルマキールティの真意に適った説なのだろうか。一見、第二説が妥当であり、第一説はきめて異例なもののように思われる。しかし、実情は第一説が伝統的な章立てなのである。ダルマキールティの直弟子デーヴェンドラブッディ Devendrabuddhi (630–690) は、第一説を支持する形で『量評釈細註』 *Pramāṇavārttikapañjikā* を著わし、シャーキャブッディ Śākyabuddhi (660–720) も、同様な形式で『量評釈註疏』 *Pramāṇavārttikaṭīkā* を著作している¹⁾。また、『量評釈』に対するチベット撰述の註釈書は、筆者の知るかぎり、そのすべてが第一説を支持するものである²⁾。このような事実があるとはいえ、第一説に疑問を抱くのは筆者一人ではあるまい。というのは、ダルマキールの他の論理学書『量決択』 *Pramāṇavinīścaya* 及び『正理一滴』 *Nyāyabindu* の章の順序は、共に、I 「現量」章, II 「為自比量」章, III 「為他比量」章であり、この二書と『量評釈』を比較した場合、第一説の異例さばかりが目につくことになるからである。また、『量評釈』がディグナーガ Dignāga (480–540) 著『集量論』

Pramāṇasamuccaya に対する註釈書であるという点を考えてみても、『集量論』のⅠ「現量」章，Ⅱ「為自比量」章，Ⅲ「為他比量」章，Ⅳ「喩例」*drṣṭānta* 章，Ⅴ「アポーハ」*anyāpoha* 章，Ⅵ「誤難」*jāti* 章という章の順序から逸脱した章立てを主張する第一説は，奇妙なものと言わざるを得ないからである。従って，もし第一説支持を表明するならば，必ずや，上記の疑問を払拭する明解な理由を提示しなければ，収まりがつかないであろう。そして，恐らく，そのような理由の提示は，提示者のダルマキールティ観とも言うべきものを考察する上で，ひとつの指標を与え，同時に，ダルマキールティ自身の思想解明にとっても重要な意義を持つことになるだろう。なぜなら，上記の問題は，ダルマキールティの思想の根幹に関わるように思われるからである。とはいえ，本稿の目的は，第一説を支持するチベットの学僧達の見解を一部紹介することに尽き，到底，問題の解明にまで到らない。筆者が，今なし得ることは，チベットの学僧達の見解を鵜呑にすることなく，批判的な視点を失わないようにする位であるが，とりあえず最終的解明へ向けての第一歩としたい。なお，チベットの学僧達は，第一説支持の理由を述べると共に，第二説を否定対象として取り上げ，それに関しても詳細な議論を展開している。本稿では，第二説否定の部分は扱い切れなかったため，別稿をもって論じるつもりである。

さて，本論に入る前に，章の順序に関する近代の研究を見ておかねばならない。周知のように，シチェルバッキー Th. Stcherbatsky, フラウヴァルナー E. Frauwallner 等多くの先学が貴重な研究を残している。しかし，先学の研究については，すでに，長崎法潤氏が，すべてを網羅した完璧な紹介をなされているので³⁾，無用な反覆は避け，必要に応じて言及しよう。ここでは，長崎氏の研究以降発表されたカイク L. W. J. van Kuip の論文に若干触れておきたい⁴⁾。カイクは「為自比量」章の冒頭に置かれた「*artha · anartha* を弁別すること (*vivecana, rnam par 'byed pa*) は比量に依存するので，それに対して誤解 (*vipratipatti, log par rtog pa*) がある故，それを設定するために説明する」という記述が，章の順序に関する問題を解明する鍵である旨を述べ，この記述に着目したニョーリ R. Gnoli の見解を高く評価している⁵⁾。カイクはチベット資料を駆使し，ニョーリの見解をさらに綿密に押し進めたチベットの学僧達の見解を始めて，公にしたのである。本稿は，このカイクの論文と重複する部分もあるが，以下に，筆者の理解出来得た範囲で，チベット人学僧の見解の一端を紹介し，その内容を

(42) 『量評釈』の章の順序について (1) (木村)

考察しよう。

II

始めに、ゲドゥンドゥプ＝ダライラマ一世 dGe 'dun grub Dalai Lama I (1391-1474) の見解を紹介しよう。ゲドゥンドゥプは、『偉大なる量の論書、正理莊嚴』 *Tshad ma'i bstan bcos chen po Rigs pa'i rgyan* (以下『正理莊嚴』) において、「テーヴェンドラブディ説」 (lHa dbang blo'i lugs) という内容科段を設け、次のように述べている。

この論書 [= 『量評釈』] が『集量論』 (Kun las btus) の評釈として作られたのならば、何故、章の順序を逆にして、「為自〔比量〕」を最初に説明したのかと言うならば……中略……この『量評釈』では、〈必要性 (dgos pa) に依存する順序〉を問題として、「為自〔比量〕」章を最初に説いたのであり、「為自〔比量〕」を最初に説明する理由は為自比量が『集量論』を説明する原因 (rgyu, hetu) なので最初に説明するのであると示していることについて、自註において「*artha* と *anartha* を弁別することは、比量に依存するので、それに対して誤解がある故、それを設定するために説明する」と説き、この意味について、ある者が⁶⁾、「*artha* は利益 (*phan pa*, *hita*), *anartha* は不利益 (*mi phan pa*, *ahita*) であり。それを弁別することとは、獲得 (*thob pa*, *prāpti*) と棄捨 (*spong pa*, *parihāra*) なのである」と言うのは、不適切である。なぜなら、一体〔この反論者は〕、(A)利益と不利益を弁別することは比量だけ (*kho na*, *eva*) に依存するので、〔「為自比量」章を〕最初に説明すると言うのだろうか、それとも (B)利益と不利益だけを別弁することは、比量に依存するので、その比量に対して誤解がある故、それを設定するために、〔「為自比量」章を最初に〕述べると言うのだろうか。第一(A)は不合理である。なぜなら、利益と不利益を弁別することは、現量にも依存するからである。〔『量決択』において〕、「利益を獲得し、不利益を棄捨することは、確実に、正しい知 (*yang dag pa'i shes pa*, *samyagjñāna*) を前提とするからである。」と〔説かれ、同じく『量決択』において〕「この二つによって、対象を確定して進むならば、結果の達成 (*don bya ba*, *arthakriyā*) に関して偽りがない (*bslu ma med pa*, *avisamvāda*) からである。」⁷⁾と説かれているからである。第二(B)も、不合理である、なぜなら、獲得すべきもの、棄捨すべきもの、どちらでもないもの (*snyoms su bya ba*, *anupeṣaṇiya*) という物 (*chos*, *dharma*) を弁別することも、比量に依存しているからである。〈自学派の説〉は、*artha* とは阿闍梨〔ディグナーガ〕がお作りになった量の定義 (*mtshan nyid*, *lakṣaṇa*) と分類等のことである。なぜなら、正理を具えている (*rigs pa dang ldan pa*) からである。*anartha* とは他学派の量の定義と分類等のことである。なぜなら、正理を具えていな

い (rigs pa dang mi ldan pa) からである。その二つ〔つまり〕正理を具えているものといないものを弁別することは、比量だけに依存するので、最初に為自比量を説明したのである。それは、現量には依存しない。なぜなら、現量は対象の考察 (dpyod pa, vicāra) に向わないからである。(7b⁵-8b²)

このゲドゥンドゥップの見解は、デーヴェンドラブッディ説として提示されているが、実際には、シャーキャブッティ説を要領よくまとめたものである。要領よさという点で価値あるものとは言えよう。しかし、この説明によって、「為自比量」章を最初に置く理由が十分に納得できるだろうか。確かに、arthaを〈ディグナーガによる量の定義と分類等〉、anarthaを〈他学派による量の定義と分類等〉と解釈すれば、その弁別を行うものは比量以外にあり得ないだろう。だが、註釈書としての形式を逸脱してまで、わざわざ「為自比量」章を最初に置く理由は、何も説明できていないように思われる。ゲドゥンドゥップの見解は不完全で曖昧なものと言わざるを得ない。ゲドゥンドゥップの曖昧さは、『正理莊嚴』の次のような言葉にも看取される。

〔章の順序に関して〕第一〔心相続に生起する (rgyu la skye) 順序〕を問題とするならば、最初に「現量」章、その後に「為自〔比量〕」章、その後に「為他〔比量〕」章を説明するのが、合理的である。なぜなら、有為 ('bus bya, saṃskṛta) が無常 (mi rtag pa, anitya) であること、そして人無我 (gang zag gi bdag med pa, pudgalanairātmya) であると論証式 (sgrub ngag) を通じて他人に教示する場合、始めに自分が理解していなければならないし、それは、また凡夫 (so skye, prthagjana) の現量によって理解できないので、比量によって理解しなければならず、比量の所依たる証因 (rten tshigs, hetu) の三相 (tshul gsum, trairūpya) も、最終的に現量によって成立しているものに依存しているからである。二つの目的を証明する連係を理解する場合も、その順序が適切なのである。それ故、『集量論』と『量決択』(rNam nges) における説明は、心相続に生起する順序なのであり…(7b⁵-8a²)

ゲドゥンドゥップは、ここで、『集量論』や『量決択』の章の順序と『量評釈』のそれとの間にある矛盾を、〈心相続に生起する順序〉・〈必要性に依存する順序〉という便利な枠組みを設けて回避しようとした。一見、合理的に見えるゲドゥンドゥップの説明は、しかし、一種の誤魔化しにすぎないのではないだろうか。なぜなら、ゲドゥンドゥップの説明には、章の順序の相違を表面的な差異として片付けようとする意図ばかりが目立ち、〈ダルマキールティは、何故『量評釈』においてのみ異例な章の順序を採用したか〉という真摯な問いかけも答も、そこには全

(44) 『量評釈』の章の順序について (1) (木村)

くないからである。

III

次に、ケードゥプジェ = ゲレクペルサンポ mKhas grub rje dGe legs dpal bzang po (1385-1438) の見解を紹介しよう。ケードゥプジェは『広大なる論書 量評釈の広説、正理大海』*rGyas pa'i bstan bcos tshad ma rnam 'grel gyi rgya cher bshad pa Rigs pa'i rgya mtsho* (以下『正理大海』)において、

阿闍梨デーヴェンドラブッディとシャーキャブッディ (Shā kya blo) の御主張の如く、最初に「為自比量」章だけを説明するのが、阿闍梨〔ダルマキールティ〕の密意なので、ここでそのように説明しよう。(Tha, 26a¹⁻²)

と述べ、まず、自己の見解がデーヴェンドラブッディとシャーキャブッディ由来のものであることを表明し、次に、ゲドゥンドゥプと同様、シャーキャブッディ説の概要を提示する。しかし、*artha* を〈ディグナーガによる量の定義と分類等〉、*anartha* を〈他学派による量の定義と分類等〉とするシャーキャブッディ説には、全く触れていない⁸⁾。恐らく、この部分に言及することは、問題の解明に何らに寄与しないと判断したためだろうが、シャーキャブッディ説の要とも言うべき部分を外しながら、しかもシャーキャブッディに準拠するというのは、奇妙なことではある。ともかく、『正理大海』におけるケードゥプジェの見解を見てみよう。

この論書〔=『量評釈』〕において、教師 (*ston pa*)〔世尊〕と彼の教説 (*bstan pa*) が過失のないものであると証明することを通じて、解脱と一切智者と〔それに到る〕手段 (*thar pa dang thams cad mkhyen pa thabs dang bcas pa*) を無顛倒に確定するのであり、それらは、また凡夫 (*tshul mthong*, *arvāgdarśana*) の現量によって直接確定できないので、比量によって直接確定しなければならず、その場合も、比量それ自身の定義と証因等に対する多くの顛倒論があるので、それらを排斥し、それらの設定を無顛倒に阿闍梨ディグナーガ (*Phyogs kyi grang po*) が『集量論』において説明していることも、きわめて理解困難であると〔ダルマキールティ〕は、御覧になり確定者たる比量と証因等に対する誤解を排斥しなければ、それらを正しく理解できず、確定する手段を正しく理解しなければ、その手段に依存して確定されるべき目的を確定できないので、それ故、解脱と一切智者と〔それに到る〕道 (*lam*) の理解は、最終的に現量に依存するけれども、直接比量だけに依存し、それに対する誤解を排斥しなければ、また、それに依存して確定されるべきそれらの目的を確定できないと〔ダルマキールティ〕は御覧になり、阿闍梨は最初に「為自比量」章だけを説明なさったのである。そのように、必要性の力によって、「為自比量」章を説明した後に、

その比量によって確定さるべき主要なもの (tsho bo, pradhāna) たる解脱と一切智者と〔それに到る〕手段を確定する「量成就」章を説いたのであり、この二つの章は手段と手段から生じたものという繋なのである。(Tha, 26b⁵-27a⁵)

やや冗長だが、合理的な見解であろう⁹⁾。「『量評釈』の目的は〈解脱と一切智者とそれに到る手段を説くこと〉であると明記し、その目的自体は『量成就』章で主に扱うテーマであるが¹⁰⁾、凡夫がそれを理解するためには、比量に依存せざるを得ないという必要性から、「為自比量」章を論の最初においた。」というこの見解は、実際には、テキストの綿密な読解によってしか妥当性の保証は得られないのであろうが¹¹⁾、筆者には、一応合理的なものに思われる。とはいえ、合理的というのは、この見解に限って言えることである。なぜなら、先にも触れたようにケードゥプジェは、シャーキャブッディ説に準拠して章の順序を確定しようとするのだが、シャーキャブッディ説からストレートにケードゥプジェのような見解は生じないからである。シャーキャブッディ説に準拠するならば、結局ゲドゥンドゥップのような見解に止るのではないだろうか。さらに言えば、*artha*・*anartha* に関するシャーキャブッディ説を否定して、*artha* を〈解脱と一切智者とそれに到る手段〉、*anartha* を〈それに反するもの〉とするような解釈を前提としなければ、ケードゥプジェの見解は生じようはずもないのである。従って、シャーキャブッディ説に準拠する限り、ケードゥプジェの見解は自己矛盾を犯すことになるのである¹²⁾。

IV

次に、サキャ派 (Sa skya pa) の学僧コラムパニソナムセンゲ Go ram pa bSod nams seng ge (1429-1489) の見解を見てみよう。コラムパの見解は、一見、前二者の抱える曖昧さや矛盾を払拭しているかのように見える。またも、長い引用になるが、彼の『広大なる論書量評釈の説明、普賢光明』*rGyas pa'i bstan bcos tshad ma rnam 'grel gyi rnam par bshad pa Kun tu bzang po'i 'od zer* から紹介しよう。

ここ『量評釈』において、何故、そのように〔『集量論』の章の順序のように〕説明しないのかと言うならば、必要性の力によって、為自〔比量〕を最初に説明したのである。必要性は何であるかと言うならば、世尊が量の人間 (*tshad ma'i skye bu, pramāṇapuruṣa*)¹³⁾であることが *artha* なのである。なぜなら、この論書の証明されるべき究極的なもの (*mthar thug*) であるから。それに反するものが *anartha* な

(46) 『量評釈』の章の順序について (1) (木村)

のである。なぜなら、この論書の否定されるべき究極的なものであるから。それを弁別することとは自性 (ngo bo) に対する誤解〔つまり〕量の人間が存在しないと主張することを否定して、必要な対象 (dgos pa'i don) のすべてを知る〔という意味の〕一切智者を証明することであり、さらに証因に対する誤解〔つまり〕証因が存在せず、それに努める者が存在しないと主張することを否定して、四つの証因を順次 (lugs 'byung, anuloma) において説明することによって証因が存在し、逆次 (lugs bzlogs, pratiloma)¹⁴⁾ において説明することによって証因たる手段に努めるべきであると証明することなのであり、それらは事物の力 (dngos stobs, vastubala) の比量に依存するので、「量成就」章において、artha・anartha を弁別する前に「為自比量」章を説明したのである。そのように言うならば、『集量論』と『量決択』において、artha・anartha を弁別する章がないので、現量を最初に説明し、ここで、為自〔比量〕を最初に説明する不共の相違も理解されることになり、〔それが〕著者〔ダルマキールティ〕の密意なのである。これと同じ方法の説明は、ヤマーリ (Yamāri, Ya mā ri) が、「説明されるであろう四聖諦 ('phags pa'i bden bzhi, catuḥsatya) については、比量の説示を理解しなければ、容易に理解できないので、比量を最初に説明するのが合理的である。』¹⁵⁾と述べたことと、ラヴィグプタ (Ravigupta, Nyi ma) が「そのように、四聖諦に向うために、比量を設定してから、それを説示するために第二章によって帰敬偈を明瞭に説明なさったのである。』¹⁶⁾と説いたこの二つであり……(Ka, 8b⁵-9a⁶)

コラムパの見解は、ケードゥブジェのものとはほぼ一致しよう¹⁷⁾。コラムパとケードゥブジェとが決定的に異なる点は、後者がシャーキャブッディ説に準拠するのに対し、前者はそれに全く言及せず、ヤマーリ説とラヴィグプタ説に準拠している点である。確かに、artha・anartha の解釈だけを言えば、コラムパのようにヤマーリ等に従う方が妥当に見える。しかし、ヤマーリ説¹⁸⁾とラヴィグプタ説¹⁹⁾を、彼ら自身の著作を通じてくわしく検討していないので、コラムパの見解にも、ケードゥブジェと同様な矛盾があるか否かについて、判定することはできなかった。

V

以上、チベットの学僧達の見解をごく簡単に辿ってきたが、〈ケードゥブジェは何故、インドの註釈家達の説を批判的に扱って、独自の見解を提示しなかったのか〉、という疑問が頭を掠める。彼の曖昧さや矛盾は、彼の見解自体にあるのではなく、インドの註釈家達との関りの中にあるにすぎないのである。ケードゥブジェは『量評釈』に対する浩瀚な註釈書を著わしており、インドの註釈家達の

説を批判的に扱いながら、独自の見解を提示することもできたであろう。彼にそうさせなかった原因は、一種のインド遍重主義あるいは、極度の伝統主義なのかもしれない。

註

- 1) 『北京版西藏大蔵経目録』, 西藏大蔵経研究会 (以下『北京版』) No.5717 (b), No. 5718の項, 及び『デルゲ版チベット大蔵経』・論疏部・因明部, 世界聖典刊行協会 (以下『デルゲ版』) vol.2-3, No. 4219, No. 4220 の目次参照のこと。なお, 『量評釈』チベット訳の章立ては, 『北京版』[No.5709]『デルゲ版』[vol.1, No. 4210] とともに第一説通りである。
- 2) Cf. Y. Fukuda & Y. Ishihama, *A Comparative Table of Sa-bcas of the Pramāṇavārttika found in Tibetan Commentaries on the Pramāṇavārttika*, The Toyo Bunko, 1986
- 3) 長崎法潤「プラマーナ・ブールティカ為自比量章の順位」仏教学セミナー 第十号, 1969, pp.18-30 長崎氏は, (a) Th. Stcherbatsky (b) R. Sāṅkṛtyāyana (c) E. Frauwallner (d) M. Malvania (e) R. Gnoli の研究を紹介している。
- 4) L. W. J. van der Kuijp, "Introductory Notes to the Pramāṇavārttika Based on Tibetan Sources, *The Tibet Journal* 4.2, 1979, pp.12-18
- 5) R. Gnoli, *The Pramāṇavārttika of Dharmakīrti*, Serie Oriental Rome XXIII, Introduction, pp. XV-XVII ニョーリは, 「この『為自比量』章は, ダルマキールティによって, 彼の著作の序論と意図された。」と述べ, 「為自比量」章の冒頭の記述に対するカルナカゴーミン Karṇakagomin の解釈を紹介している (p. XVII)。その解釈とは artha を利益 (hita) anartha を不利益 (ahita) とみなすものである。この解釈は後に本論でも明らかになるが, 註釈家達によって否定対象として扱われている。カイクプは, 如何なる理由のためか, ニョーリの見解よりはるかに詳細で合理的なマルヴァニア D. Malvania の見解には触れていない。マルヴァニアは, 次のように言う。「artha の意味について, カルナカゴーミンは, この言葉に関する様々な見解を批判した後で, artha は四聖諦の達成に他ならないと説明する。……中略……「量成就」章は, 世尊仏陀を量であると確立することを目的としている。四聖諦を説く故に, 彼は量であると言われるのだ。しかし, 比量の助けなくして, 我々はどのようにして, 四聖諦の何事かを知るのだろうか。ダルマキールティにとって比量の妥当性と本質は, 真先に確立する必要があったと思われる。故に, ダルマキールティは他より比量を優先したのだろう。これは, 彼が何故, 「為自比量」章に註釈を書き, その章を『量評釈』の最初に置いたのを説明するのである。」D. Malvania, *Svārthānumāna-pariccheda*, Hindu Vishva-vidyalaya Nepal Rajya Sanskrit Series Vol. II Introduction pp.5-6, マルヴァニアの見解は後に本論で紹介するチベット人学僧の見解と驚くほど一致している。ニョー

(48) 『量評釈』の章の順序について (1) (木村)

リ (pp. XV–XVI, note 1) とマルヴァニア (p. 5) は、また、「為自比量」章において、他の章が未来形で示されていることを指摘し、「為自比量」章が論の最初に置かれる根拠のひとつとしている。きわめて有力な見解であろう。ところで、章の順序に関する問題を扱う時、フラウヴェルナーの業績を忘れることはできない。〈「為自比量」章は、『集量論』に対する註釈書ではなく、本来、Hetupurakaraṇa とでも名付けられるべき独立の著作だった。〉という彼の見解は、説得力のある証明に裏付けられている。“Die Reihenfolge und Entstehung der Werke Dharmakīrtis”, *Kleine Schriften*, pp. 677–689 フラウヴェルナーの見解については、別稿で論じたい。

- 6) これ以降の説明は、シャーキャブッディ『量評釈註疏』(sDe dge, ed. No. 4220, Ja, 4b⁷–6a²) にトレースできる。これに対応する Skt. は、カルナカゴーミンの註釈に見られる。 *Karṇakagomin's Commentary on the Pramāṇavārttikavṛtti of Dharmakīrti*, Rinsen Book Co. 1982. pp. 4–6 なお、註 5) のニューリの見解と比較されたい。
- 7) cf. T. Vetter, *Dharmakīrti's Pramāṇaviniścayaḥ I. Kapitel: Pratyakṣa* 1965 p. 30
- 8) ゲドゥンドゥップの言及の仕方と相違する。以下にその個所を紹介しよう。「もし、*artha* と *anartha* を弁別することは、比量に依存する (Tx. *bstan pa* を *brten pa* に改ためて読む) ので、比量を最初に説明するのならば、それは、また (A) *artha* と *anartha* を弁別することは比量だけに依存するのでと言うのだろうか、それとも、(B) *artha* と *anartha* を弁別することだけが、比量に依存するのでと言うのだろうか。第一 (A) は不適切である。なぜなら、それらを弁別することは現量にも依存するからである。それ故、『量決択』において、『利益を獲得し、不利益を棄捨することは、確実に正しい知たる現量と比量両方に依存する』と説明することと内部矛盾 (*nang 'gal*) になるのである。第二の立場 (B) の如くならば、*artha* と *anartha* を弁別することだけは、比量と現量に依存する依存しないという相違はないので、その理由を通じて比量を最初に説明するのならば、現量も最初に説明することが合理的となってしまう。*artha* と *anartha* を弁別することは現量にも依存するからである。」(Tha, 26a⁵–26b⁴) シャーキャブッデ説への言及は、以上で終わっている。
- 9) 註 5) のマルヴァニアの見解と比較されたい。
- 10) 拙稿「チベット仏教における論理学の位置付け」山口瑞鳳監修『チベットの仏教と社会』春秋社 S. 61, pp. 379–381 参照のこと
- 11) 単に比量に依存すると言うのではなく、「為自比量」章のこの部分を知っておかなければ、「量成就」章のこの個所は理解できない、という証拠が必要に思われる。
- 12) 不思議なことにケドゥップジェは『集量論』・『量決択』・『正理一滴』の章の順序と『量評釈』のそれとの相違について、何も言及していない。

- 13) tshad ma'i skye bu については, E. Steikellner, "Tshad ma'i skyes bu. Meaning and historical significance of the term", *Proceeding of the Csoma de Kőrös Symposium*, Velim-Vien 1983. pp.275-285 参照のこと
- 14) anuloma・pratiloma については, M. Inami & Tom J. F. Tillemans, "Another Look at the Framework of the Pramāṇasiddhi Chapter of Pramāṇavārttika" *WZKS*. 30, 1986. pp.125-142 拙稿「Pramāṇavārttika pramāṇasiddhi 章における anuloma・pratiloma について」印仏研 35-2, S.62 参照のこと
- 15) ヤマーリ 『量評釈莊嚴註疏・極円浄』 *Pramāṇrvārttikālamkāraṭīkā-Supariśuddhā* (sDe dge. ed. No. 4226, Phe, 191a¹⁻²) にトレースできる。cf. Kuijp *op. cit.* p.28, Notes 62
- 16) ラヴィグプタ『量評釈註』 *Pramāṇavārttikavṛtti* (sDe dge.ed. No.4224, Pe,293b²⁻³) にトレースできる。なお、訳文中の「第二章によって」という部分は、コラムパの引用では, le'u gnyis pa となっているが、トレース個所の le'u gnyis pas に従った。
- 17) 註5) のマルヴァニアの見解と比較されたい。cf. Kuijp *op. cit.* pp.16-18
- 18) 『北京版』No.5723 の項, 『デルゲ版』Vol. 11, No. 4226 の目次参照のこと。シチェルバッキーは「ヤマーリは第一説に従う」と報告している。Th. Stcherbatsky *Buddhist Logic*. Vol.1, pp.44-45
- 19) 『北京版』(No.5722, No. 5726 の項) は, 順に「現量」章註, 「量成就」章註を彼の註釈書として提示し, 『デルゲ版』(Vol.9-10, No.4224, No.4225) は, 順に「量成就」章註・「現量」章註を提示している。シチルバッキーは「ラヴィグプタは第一説に従う」と報告している。cf. Th. Stcherbatsky, *op. cit.* p.44

S.63 7/18 脱稿

〈使用テキスト〉

- ゲドゥンドゥブ *Tshad ma'i bstan bcos chen po Rigs pa'i rgyan*, The Collected Works vol.5.
- ケードゥプジェ *rGyas pa'i bstan bcos tshad ma rnam 'grel gyi rgya cher bshad pa Rigs pa'i rgya mtsho*, Tohoku. No.5505.
- コラムパ *rGyas pa'i bstan bcos tshad ma rnam 'grel gyi rnam par bshad pa Kun tu bzan po'i 'od zer*, Sa skya'i bka' 'bum, vol.11, The Toyo Bunka.